

創世記 第18章20～33節

コロサイの信徒への手紙2章6－15《16－19》節

ルカによる福音書 第11章1～13節

本日の聖書日課は、以前のものとはほぼ同じです。特祷も文章は少し変わりましたが、内容はほぼ同じです。特祷、創世記、福音書、それらから導かれるテーマは、主なる神様に願うこと、祈りです。

旧約日課は、先週の箇所からの続きです。先週の箇所では、アブラハムとサラの間に、男の子が誕生することが予告されました。それがイサクの誕生として実現するのは21章です。それまでの間に、有名なソドムとゴモラという町の滅亡のお話があり、その前半部分にあたるのが本日の箇所です。聖書の小見出しには、「アブラハムの執り成し」とあり、アブラハムは、ソドムとゴモラの人々のために主なる神様に執り成しの願いをします。

聖書日課は、創世記18章20節からですので、突然ソドムとゴモラのことが話題になるように思えますが、その前があります。16節に「その人たちはそこをたって行き、ソドムの方面を見下ろした。アブラハムは彼らを見送るために一緒に出かけて行った」とあり、「その人たち」とは、アブラハムを訪れた人たち、御使いたちですから、お話は、先週の箇所から続いているのです。そして、「その時、主は言われた。『私は、これから行おうとしていることをアブラハムに隠しておいてよいだろうか。』」と、主なる神様がお考えを示します。その理由は、13章13節で「ソドムの人々は主に対して、極めて邪悪で罪深かった」と告げていたことでもあります。アブラハムは必ずや大いなる強い国民となり、地上のすべての国民は彼によって祝福される。私がアブラハムを選んだのは、彼がその子らとその後に続く家族の者たちに命じて、彼らが正義と公正を行い、主の道を守るようにするためであり、主がアブラハムに約束されたことを成就するためである（創18:18、19）ということです。つまり、主なる神様が選んで、地上のすべての国民の祖となるアブラハムを祝福するため、そして、アブラハムが正義と公正を行い、主の道を守るためなのです。ソドムとゴモラのお話は、アブラハムを守り導くためという趣旨があることを忘れてはならないのです。

具体的な展開は、22節から始まります。「その人たちはそこからソドムの方へ向かって行った。しかしアブラハムはなお主の前に立っていた」とあるのですが、アブラハムを訪問した三人の御使いたちが立ち去った後も、アブラハムは主の前に立っていたということです。新共同訳では、「主の御前にいた」となっていますが、聖書協会共同訳は、以前の口語訳と同じく、「主の前に立っていた」となりました。こちらの方が直訳に近く、次にある「アブラハムは進み出て言った」という表現に円滑につながります。そして、アブラハムの有名な執り成しの願いの部分が続きます。

アブラハムは、ソドムとゴモラが罪深いことを知った上で、もしそこにわずかでも罪のない人がいたら、一緒に滅ぼすようなことをしないでくださいと願います。もし50人いたらと交渉が始まり、最終的に10人でもいたら滅ぼさないということになります。人間が主なる神様と交渉する、主なる神様が行おうとする事柄に、制限を入れようとするというのは、大変面白いお話です。アブラハムの言葉「正しい人がいても、その町を赦さず、本当に滅ぼされるのでしょうか」（創18:24）にある通り、アブラハムが願わなければ、主なる神様は、ソドムとゴモラに罪のない人がいるかいないか確認しないまま、滅ぼそうとしていたのかという点も面白いところです。このお話も、創世記の他の不思議なお話と同じく、注目すべき点はたくさんあるのですが、今日わたしたちが見出すべき事柄は、正義の実行のために、平和の実現のために、悪を滅ぼすために、多少の犠牲はやむを得ないという発想は間違いであるということでしょう。もちろん、アブラハムが一番心配したのは、「アブラムはカナンに住み、ロトは低地の町に住んで、ソドムの近くに天幕を移した」（創13:12）にある通り、実際には、ソドムに住んでいる甥ロトの家族のことであったのかもしれませんが。しかし、そうだとでもロトだけを特別扱いすることを願うのではなく、もし彼らが50人、40人、30人、20人、10人と制限されていく「正しい人」の枠に入るならばという条件で願っているのです。アブラハムが主なる神様に願ったからこそ、正義と公正が行われたのです。

さて、福音書はルカの物語です。特に「主の祈り」と、願い求めることがテーマのたとえ話の箇所です。主の祈りは、『聖書（新約）』には、マタイ福音書（長い）とルカ福音書（短い）にしか記されていません。またわたしたちがいつも用いる主の祈りは、マタイ福音書の方を基にしています。ルカ福音書の文言は少しなじみがないといえます。しかし、主なる神様に呼びかけて、神様に関わることと、人に関わることを願っている点は同じです。

創世記と福音書のお話から学ぶことは一つです。現代のわたしたちは、どれほど主なる神様に真剣に願いをしているか、祈っているかということです。現代と申しましたが、地上に正義と公正が行われていない限り、いつの時代でも、どこにおいても、といってもよいかもしれません。この世界に主なる神様の正義と公正が行われていない限り、わたしたちにとって、真剣に祈ることが大切なのです。もちろん、その祈りであっても、自己中心になってしまうこともあります。自己中心とまではいかなくても、祈りが偏ってしまう場合があります。また、自分の願望通りに祈りが叶うことがないために、失望してしまうこともあります。しかし、だからこそ、イエス様は、わたしたちに主の祈りを教えてくださいましたのだと思います。それも二つありますから、短い方でもよいということなのでしょう。これからも教会の中で、祈り続けたいと思います。各個人の祈りが大きな祈りへと変わっていく、そしてその大きな祈りが神様に届いて、世界をよい方向へと変えていく、そのような歩みができればと思います。